生存戦略としてのIT入門

自分でつくるセーフティネット

佐々木俊尚
sasaki toshinao

大和書房

生存戦略としてのIT入門

自分でつくる セーフティネット

佐々木俊尚
sasaki toshinao

大和書房

佐々木俊尚（ささき としなお）

作家・ジャーナリスト。
1961年兵庫県生まれ。早稲田大政経学部政治学科中退。
毎日新聞社などを経て、フリージャーナリストとしてIT、メディア分野を中心に執筆している。
インターネットやコンピュータのテクノロジは、われわれの社会をどのように変容させ、ネットとリアル社会の境界部分ではどのように融合していくのか。そのリアルな局面を描き、その先に待ち受ける未来ビジョンをできうるかぎり事実に基づいて描写することを仕事の基本テーマとしている。
著書は『レイヤー化する世界』（NHK出版）、『「当事者」の時代』（光文社）、『キュレーションの時代』（筑摩書房）、『簡単、なのに美味い！家めしこそ、最高のごちそうである。』（マガジンハウス）など。

佐々木俊尚公式サイト　http://pressa.jugem.jp/
twitter　@sasakitoshinao

自分でつくるセーフティネット
生存戦略としてのIT入門

2014年8月5日　第1刷発行

著　者　佐々木俊尚
発行者　佐藤　靖
発行所　大和書房
東京都文京区関口1-33-4
電話 03-3203-4511

ブックデザイン　水戸部　功
校正　メイ
カバー印刷　歩プロセス
本文印刷　シナノ
製本　ナショナル製本

©2014 Toshinao Sasaki Printed in Japan
ISBN 978-4-479-79432-5
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
http://www.daiwashobo.co.jp

目次

はじめに――猛獣になれないわたしたちが生き残るには……3

1 セーフティネットは自分でつくる時代

――一生安泰はもう終わり

まさかのビジネス戦略……21
あのころは会社が好きだった……24
安心感を生み出すムラ意識……27
「会社」がつくった何とも素敵な仕組み……31
私服を着こなせなかったサラリーマン……35

安定しているのに息苦しい……37
「会社の生命は永遠です」と言って自殺する企業戦士……41
グローバル保守というパラドクス……43
目立たず、失敗せず、狙うは満額定年……46
一体、誰が逃げ切れるのか……48
戦術と戦略の違い……50

2 総透明社会の時代
——自分を丸見えにすることで得られるもの

「リア充自慢」と思われずに「いいね！」してもらう方法……55

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

友だちが少ない人はどうすればいい？……58
ユーザー数、十億人の理由……61
ボタンひとつでささやかな意思疎通……63
名刺より信頼できるプロフィールとは……65
「肩書き」より「人間力」……68
「監視社会」の何が困る？……70
個人情報は「足切り」に使われるだけ……72
監視社会より冷酷な「黙殺社会」……75
総透明社会は「交換しあう」ことで成り立っている……77
ネット探偵から逃れることはできるか……80
完全なプライバシーはもはやどこにもない……83
病気を公開したら、差別どころかみんなが助けてくれる……86
泥棒のリスクか美味しい店情報か……88
悪意に満ちた発言は、自分の評価を下げる……92
悪意も丸見えだけど、善意も丸見えになる……94

3 ゆるいつながりの時代

――強すぎる「きずな」は「同調圧力」を生み出す

きずなも同調圧力も「強いつながり」がもたらす……99
強いきずなからはじき飛ばされた時どうする……102
人間関係も鉄道から自動車へ……106
コミュニケーションがなければ高速道路は走れない……108
正社員切符を手に入れれば、食いっぱぐれなかった時代……114
仕事を失った時、助けてくれる意外な人……118
人は「人に教えてあげたい」生き物……120
共通点が少ないほど、知らない情報を共有できる……122
ゆる～くつながる新しい「情の世界」……126

4 見知らぬ人を信頼する時代

——だからフェイスブックがある

渡る世間に鬼はいるのか？……131
日本が安全と言われる本当の理由……134
なぜ日本人は「旅の恥はかき捨て」ができるのか……136
ヒッチハイク文化を崩壊させた猟奇殺人……138
再び見知らぬ人を信頼しはじめた……143
ネットでは嘘がつけない……145
シェアサービスの根底は信頼……147
「だからフェイスブックがあるんですよ」……149
みんなでちょっとずつ、が新しい情の世界……151

5 「善い人」が生き残る時代

――嘘がつけないネットでは、善い人も悪い人も丸見え

「善い人」であることが、最強の生存戦略……157
善行と現世利益……160
善行は堂々と積んだほうがいい……162
会社のために黙々と働いても、報われない時代……164
わたしたちは、実は苛烈で残酷……167
寛容であること、そして与えられる人になること……171

6 生き方そのものが戦略になる時代

——善悪は宗教や道徳を超える

いつまでも若者ではいられない……177
成熟するとは、汚れを引き受けること……179
ピュアな人ほど、人のあら探しをする……181
被害者意識という最強の武器……183
今日の勝者は、明日の敗者……187
弱者が与えてくれる安心感……190
人生はいつでも「入れ替え可能」……193
善人と悪人のほんのわずかな違い……196
「生き方」は宗教や倫理を超えた、生存戦略……200

終わりに——新しいつながり、新しいセーフティネット、新しい日本……202

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

生存戦略としてのIT入門

自分でつくる セーフティネット

佐々木俊尚
sasaki toshinao

大和書房

セーフティネットが危ない

昭和の時代は、いまになって振り返ってみれば、よい時代だったなあと最近つくづく感じます。わざわざスローガンのように言われなくたって、ちゃんとそこに「きずな」や「団結」がありました。特に会社のような組織の中にね。

もちろんみんなが仲良しだったわけじゃありません。当たり前ですが、嫌なやつもいました。わたしは一九八一年から九九年まで全国紙の新聞社に勤めていたんですが、**こすっからい上司や先輩、後輩が本当にいるんだってのを、山ほど体験しました。**

たとえば事件事故の現場に先輩記者と一緒に行って、一緒に関係者に取材して、けっこういい特ダネがとれたとき。「これは社会面のトップ記事ぐらいになるんじゃないか

なあ」とほくそ笑んでいると、先輩が「佐々木君、じゃあ僕は一足先に戻って原稿をつくってるから、もう少し取材続けてくれよ」って言うんです。原稿つくってくれるって助かるなあと思って、そのまま外の取材を日が暮れるまで続けて、取材拠点に戻ってみると、くだんの先輩が自分の署名「だけ」でさっきの取材記事を書いてて、わたしの名前はどこにも入れてない！　ぽかーんとしてると、先輩がしれっとした顔で言いました。

「僕のほうで補足の取材もたくさんしたから、僕の名前で書いておいたよ。協力してくれてありがとうね」

何言ってやがるんだ、って憤然としますよね。新聞社ではこういうことはいっぱいありました。

まあでもそういう時に、必ずなぐさめてくれる人もいる。尊敬する別の先輩記者が穏やかな表情で、

「でもなあ佐々木、ちゃんと見てくれてる人は見てくれてるんだから、心配するな。お前の仕事はちゃんとみんなわかってるから」

となぐさめてくれたりしたんですね。この**「見てくれてる人は見てる」っていうセリフは、終身雇用の家族的な会社では殺し文句**で、わたしもこのセリフにどれだけ助けられ、心なぐさめられたことか。黙々とやっていれば、きっと誰かが気づいてくれる。派

手な立ち回りとか虚飾をしなくても、きちんと仕事をしていれば、いい上司にめぐまれればちゃんと自分を立ててくれる。そういう価値観が、昭和の時代のサラリーマンにはきっちりとあったと思うし、それが会社員としての生きかたの軸になってたっていう人は多いと思います。

会社という大組織の理不尽さに涙する時も、この「見てくれてる人は見てくれている」ってのが、いつも心強さの根幹になっていたと思うんです。仕事で失敗があって、誰かが責任を取らなきゃいけなくなる。その責任のお鉢が、自分のところに回ってきてしまう。「誰かが責任を取らなきゃいけないからな。でもお前だけの責任じゃないってことは、おれはわかってるから」。そう部長に言われると、「部長はおれの気持ちをわかってくれているのだ」と心の底で涙して、会社に対する憤りや反論みたいなものはそっと胸の中にしまっておける。

いまになって思い起こしてみると、この時代の会社には「理の世界」と「情の世界」のふたつがあって、そのふたつの世界が行儀良くうらおもての二重底みたいになっていたから、うまく動いていたんじゃないでしょうか。論理的には正しくて反論できなくても、心の中の感情はそれに反発してしまう。そういう時に、上司とか先輩が情けをかけてくれることで、「理には負けたけれど、情で救ってもらった」と安心することができ

た。そういう「理」と「情」の二重底で、社会はうまく動いていたと思うんですよ。

ところがいま、日本には「情の世界」がとても乏しくなってきています。**会社の終身雇用がだんだん崩壊してきて、若い人が非正規雇用に追いやられて、「情」を維持することができなくなってきています。**いっぽうでグローバリゼーションという極めつきの超強烈な「理の世界」が日本に押し寄せてきて、日本企業は防戦一方。中には敗退するところまで出てきました。

これがわたしたち日本人のセーフティネットを、たいへん危ない状況にしてしまっています。

セーフティネットというのは、もともとはビル工事現場などにある転落防止網のことですが、より広くは「わたしたちがホームレスになったりしないように用意されたさまざまな防御策」というような意味で使われています。国が用意しているセーフティネットには失業保険とか生活保護があります。企業に正社員雇用されるというのも、解雇されにくくなるという意味でひとつのセーフティネット。また生活が安定している親や兄弟がいれば、なにかあったときに助けてくれるでしょう。これもセーフティネット。あなたの夫や奥さんも、そして成人したらきっと親を助けてくれるであろう子どもたちも、もちろんセーフティネット。それから、貯金や保険だって、立派なセーフティネット。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo